Steel Landscape 鉄の点景

鉄釉

「油滴天目茶碗」。黒釉の中に含まれる鉄の粒子が、偶然に定着して斑紋となった現象を「油滴」と呼ぶ。豊臣秀次から西本願寺へと伝来した大名物として知られる茶碗（大阪市立東洋陶磁美術館蔵）が有名。

その偶然は、陶磁器づくりにおける焼成の段階で起こった。燃料に用いた薪の灰が陶磁器の素地にかかり、それが融けて器表がガラス状に仕上がった。「釉薬」誕生のきっかけである。以来、釉薬の使用は陶磁器作りの常識となっていくと同時に、様々な色合いを生み出すための釉薬が調合されていくようになった。今回は釉薬の中でも酸化鉄を使用した「鉄釉（てつゆう）」について触れていきたい。

釉薬の中でも種類の多い「鉄釉」

釉薬とは、ガラス質を含む泥状の材質で、陶磁器の器表にかけて焼成すると融けてガラス状の薄い層をなすものである。それらの層は陶磁器に汚れをつきにくくし、表面に硬度を与え、光沢をだす働きをする。釉薬には木灰を原料とする灰釉の他、鉄を含むものや、銅、コバルト、マンガンを含むものがある。鉄を含む釉薬を全て「鉄釉」と呼ぶならば、その種類は極めて多い。鉄分の少ない順にあげると、黄瀬戸釉・飴釉・古瀬戸釉・鉄赤（柿）釉・黒天目釉（くろてんもくゆう）・瀬戸黒（せとぐろ）釉・蕎麦釉（そばゆう）・柿釉などがある。伝統的な釉薬に関していえば、銅を主体とした織部釉、辰砂釉（しんしゃゆう）等と白釉を除けば、ほとんどの釉薬が「鉄釉」に属することになる。

釉薬中に含まれる鉄分の量と陶磁器の色合いとの関係は単純ではない。鉄分の量が同じでもそれ以外の成分の含有量や焼成温度、時間、陶磁器本体（粘土など）の成分など様々な軸が絡み合って生まれる色合いは、千差万別と言っていいだろう。

日本における釉薬の歴史

我が国で陶磁器に色が施されるようになったのは、奈良時代に中国から「三彩陶」が輸入された後のことで、それまでは自然釉だけであった。自然釉とは窯の中で薪の灰が溶融剤となり粘土中の長石（ナトリウム・カルシウム・カリウムなどのアルミノ珪酸塩鉱物）を溶かして生まれるガラス質のことである。「鉄釉」が使われるようになるのは鎌倉時代の後半である。この頃には天目茶碗に黒褐色の鉄釉が用いられ、 高台部周辺には光沢のない

錆（さびゆう）釉が施されるなど、鉄釉も多様になっていく。さらに、室町時代には擂り鉢など錆釉が単独で施される製品が焼かれ、戦国時代になると灰釉をベースに少量の酸化鉄を加えた黄瀬戸釉や酸化銅を用いた緑釉などが登場した。

室町後期に台頭してくる「茶の湯」の流行は、日本の焼き物黄金期幕開けのきっかけとなる。桃山時代の桃山陶は豊臣秀吉が政治の道具に使ったものの、「詫び、寂び」の美意識に裏付けられ、造形的にも色彩的にも飛躍的に多彩になっていった。鉄釉で絵を描く「絵唐津」が生まれたのもこの時代である。

僅かな成分の差が織りなす美の世界

陶磁器などで色彩が表れ出ることを呈色というが、呈色の視点から釉薬を分類する場合、酸化鉄を用いる鉄釉は媒熔剤の種類と焼成方法により青（青磁釉）黄（黄釉）褐色（褐釉）柿（柿釉）黒（黒釉）の各色に発色する。また、石灰釉に多量の紅柄（べんがら）（酸化鉄を主成分とした赤色顔料）を20％前後添加すると、小豆色の細かい結晶を敷き詰めたような、点々と小さな結晶面による金属光沢が現れる釉が出来る。これは鉄砂釉（てっしゃゆう）とよばれ、還元焼成の磁器用色釉として古くから使用されている。

鉄以外の呈色剤として銅を用いた場合は、緑（青緑釉）青（青釉）赤（紅釉）の各色に発色し、酸化コバルトを用いた釉薬では青、藍（藍釉）、瑠璃（瑠璃釉）の各色に発色する。また、媒熔剤として錫を用いると白濁した発色となる。

釉薬に含まれるほんの僅かな成分の違いによって釉薬の名称も変わるように、焼き上がる作品の色も微妙に、あるいは大胆に変化する。窯から出すまで作品がどう仕上がるかわからないのが陶磁器の世界の醍醐味だろう。釉薬は長い歴史を通して陶磁器の世界の縁の下を支え続けてきた。酸化鉄、いわゆる「さび」は本来無用の長物のように扱われる場合が多いが、陶磁器の世界では美を創造する一つの要になっている事実は興味深い。

●取材協力　根津美術館、鏡山窯

「黄瀬戸獅子香炉」。黄瀬戸釉（灰釉に1～2％の酸化鉄を加えたもの）を施した香炉で、桃山時代の作品。透明で光沢のある釉調や釉肌は中国の青磁を目標としていたと言われる。伝世の初期の「黄瀬戸」としては貴重な作品。

「天目茶碗」。南宋時代の作品。天目釉は石灰釉、石灰マグネシア釉の透明領域の組成の中で鉄分を8～10％含有する釉。写真の作品は細かい禾目（のぎめ）のような斑点が現れているので、のちに禾目天目と称されている。

■代表的な鉄釉

名　前	特　徴
黄瀬戸釉	灰釉（珪長石に灰を混ぜたもの）で自然に含まれている鉄分あるいは1～2％の酸化鉄を加える。淡い黄色の釉薬。
古瀬戸釉	灰釉から端を発した古来の瀬戸地方の基礎となった釉薬。焼き上がると透明度の高い朽葉色になる。
瀬戸黒釉	灰釉あるいは石灰で鉄を含む釉薬。陶器釉で、高温で窯から引き出して急冷すると黒色の釉薬ができあがる。
天目釉	石灰釉、石灰マグネシア釉の透明釉領域の組成の中で、鉄分を8～10％含有する釉薬。光沢のある黒褐色の釉薬で、おもに陶器に広く用いられる。

唐津焼の釉かけ作業。素焼きまたは絵付けの後にうわぐすりとして鉄釉などを使用する。（右）完成した絵唐津の茶碗。